『言語』月刊誌「ポライトネスの言語学」特集号 大修館書店 1997 Vol. 26, No. 6, pp. 72- 79

日本語の敬語と西洋語の人称

ヴロダルチック・アンドレ

敬語と人称とはコインの両面のようなものなのである。西洋語の人称の機能との比較・考察を通し、言語体系の中で日本語の敬語を位置づける

1．敬語と人称の対比

19世紀末から20世紀半ばまで、敬語は「人称」というカテゴリーとともに論じられていたが(とくにChamberlain B.H., Aston W.G., Polivanov E.D., 山田孝雄、木枝増一)、その後(日本では1920年代から、欧米では1945年から)この視点は見られなくなった。しかし、敬語と人称は、基本的に動詞(動作)と関連する概念であり、色々な品詞(名詞、代名詞、動詞、その上敬語の場合には形容詞)で表わされる一般的なカテゴリーとして考えたほうが望ましいと思われる。

人称の場合は第一人称、敬語の場合は話し手がそれぞれの体系の中核をなしている。というのは、第一人称の機能とは文の主語と話し手との同一性を示すことであり、文の主語である話し手の機能とは、自分の行動について話す時に、文脈(話の場面)の一番重要な参加者の個性を表わすことだからである。敬語は、人称とは異なり、文の「格的」構成(動作主)と文脈の参加者との関係を表現しない。言い換えれば「人称」というカテゴリーは、文脈の参加者の相関的(評価的)な個性を示す役割をもつものである。このように考えると、人称の機能とは制定的なルール(constitutive rules)に、敬語の働きとは規範的なルール(normative rules)に従うことになる。更に、その二つのカテゴリーの共通性は、副次的な機能においてのみ比較可能だと考えてもよい。つまり、敬語は人称の裏面であり、比喩的な表現を使うとしたら、敬語と人称とはコインの両ｼ面のようなものなのである。

2．敬語の人称と機能−その談話主題と第一人称

文法的単位(または文法的形態素)には、１つのカテゴリー的な意味と、複数の副次的意味が含まれている。この副次的意味とは概念的意味のことであるが、ここでは潜在的な(virtuel)ものとしてとらえることにする。そもそも言語単位の非カテゴリー的意味は、人間の言語の特徴である「開かれた」特徴に起因するのだが、これは特に文法におけるすべての恣意的変化または慣用的変化を可能にする副次的意味に

よるものである。この潜在的意味は、話し手、状況または文脈、既有の知識、そして聞き手の感情などの様々な要因によっても左右されるものである。また本論で文法的形態素の「意味」について述べるとき、それは「機能」のことを指す。

敬語の形が語用論のレベルと統語論のレベルをつなぐことができるのは、談話主題の表現を通してである。敬語のマイナス評価的とプラス評価的な形が指示している談話主題は、常に文の主語とむすびついている。日本語においては、発話当事者と統語上の主語が同一のものであるということは、敬語の形よりもむしろ、「〜てくれる」「〜てあげる」のような動作の起点を表わすモダリティなどの他の手段によって明らかにされると思われる。

談話主題とは、談話における非発話当事者の一つである。ある同じ動詞の主語にあたるものとしていくつもの談話主題が考えられるとき、敬語の選択が問題になってくる。普通体と敬語との変換(＝敬体変換)について、田中(1983)は、これは数と敬語の形の関係についての問題に類似していると述べている。以下の(1a)(1b)については、必ずしも敬体変換は必要ではない。しかし、(1c)は(1d)よりも許容度が低いようである。

(1)a. 王様と女王様は山に登った。

b. 王様も女王様も山に登った。

c. ?? 王様と家来は山に登った。

d. 王様は家来を連れて山に登った。

(1c)の文は、「王様」と「家来」ほどに身分の異なる二人を同じレベルにおけないことを表わしている。よって、ここでは敬語と数の関係というよりもむしろ、談話主題の社会階級の差が問題になっているのである。

西洋語では、談話主題が体系の中核をなしている日本語とは異なり、第一人称が中核になる。多くの言語学者が第一人称は言ってみれば最も「重要な」ものだとしている(Fraser T., Joly A., 1979)。Jakobson(1963)は「発話の実際の参加者である第一人称と、発話の実際の、または潜在的な参加者である第二人称は対立関係にある」とし、Lyons(1982)も、第一人称は人称というカテゴリーの主要要素だとしている。Hagege(1982)は統計的な裏づけをもとに「第一人称は統語論的にほかの第二人称、第三人称に近いが、独自の性質をもっている」と述べている。

3. 敬語の評価的な機能(estimative function)

敬語表現の形態素については、Lewin(1969)が「待遇法は、発話内容の人称と、発話当事者の対人関係を表わす」と要約したように、今までに繰り返し言及されてきている。発話当事者の同定は[±Loquent]という素性にのみ基づいて行われる。すなわち、共同発話者は、「対話」の参加者なのである。非発話者はいてもいなくてもよ

いが、発話の交換の外部者としてみなされる。「談話主題」という広い領域は、Malliard(1974)の言う「話題になっている人」「話題になっているもの」の２つの意味領域に分けられる。よって、次のように定義する。

① 話し手：動作主[+Loquant](話している人)

② 聞き手：被動作主[+Loquant](話し手が話しかけている人)

③ 談話主題：存在[+Loquent]または物体[-Loquant](発話行為の中で、話題になっている人またはもの)

また、「評価的な」とは、自分や聞き手、非発話当事者の行動をどう扱うか、ということである。更に、話し手と聞き手のことを「発話当事者」と呼ぶことにする。なぜなら、両者は(たとえ聞き手は明示されていなくても)談話に参加しているからである。また、談話主題は必ずしもコミュニケーションに参加しているわけではないので、「非発話当事者」と呼ぶことにする。「話題になっている人」という談話主題の定義は、文の「内容」の一部とみなすような意味論のレベルでとらえるのではなく、「談話の場にいる、またはその場にいない非発話当事者」というような語用論のレベルで理解するべきであろう。

(2a)(2b)の２つの発話において発話当事者と非発話当事者はそれぞれ以下のようになる。

(2)a. お母さんはご心配にならなかったんですか。

話し手：聞き手または談話主題になじみの薄い人物／聞き手：談話主題の娘／談話主題：聞き手の母(その場に不在)

b. いいえ、さっそく帰って話したら、とても喜んでいました。

話し手：談話主題の娘
／聞き手：聞き手または談話主題にとってなじみの薄い人物／談話主題：話し手の母(その場に不在)

この２つの発話において談話主題は、指示的には同一人物だが、談話主題である主語の動詞に接続された敬語の形が異なっている。それは、ここでは話し手によってメタ指示的に談話主題がとり上げられているからである。すなわち、ある時にはなじみの薄い人物として、ある時には家族の一員として扱われているからである。もちろん(2a)(2b)それぞれの例において話し手は異なるのだが、同一の話し手であっても同じ人物を違う方法でとり上げることもある。(3)(4)はその例であるが、一人の人物が自分の妹と先生にむかって話しているところである。

(3) お父様をあなたといっしょにお見送り申し上げましょうね。

話し手：姉／聞き手：妹／談話主題：二人の父

(4) 父を妹といっしょに見送ろうと思いまして・・・。

話し手：談話主題の娘／聞き手：話し手の先生／談話主題：話し手の父

(3)においては、「お父様」という名詞と「見送る」という動詞が用いられていることによって、話し手が家族の中で、談話主題に対して自分を低く位置づけていることがわかる。(4)においては、話し手と談話主題は(3)と同じであっても、敬語の形が異なる。すなわち、メタ指示的構図の中で、話し手は先生を部外者としてみなしているのである。

ここで、評価的な機能を敬語の一般カテゴリーとしてとり上げてみよう。この機能はまず、次の上下関係に関するものである。

① 談話の際の話し手と聞き手の関係

② 話し手と談話主題または聞き手と談話主題の関係

③ ２つあるいはそれ以上の談話主題の間での関係

しかし③の評価的機能は、日本語には現れない。これには同じ動詞についてプラス評価的な形とマイナス評価的な形の関わりをもたせなくてはいけなくなってくるのだが、尊敬語の謙譲語化(＊お＋動詞になりする)も、謙譲語の尊敬語化(＊お＋動詞しになる)も不可能だからである。次の北原(1979)の複合動詞の例を見てみよう。

(5) Ａ氏がＢ氏をお招きしなさった。

この文において、「招く」の謙譲語である「お招きする」と、「する」の尊敬語である「なさる」が組み合わされているが、これによって非発話当事者同士の関係(Ａ氏のＢ氏に対する敬意)と、話し手と談話主題であるＡ氏の関係(話し手のＡ氏に対する敬意)がわかる。

(6a)は(6b)と(6c)の文を組み合わせたものである。

(6)a. 田中さんも先生をお招きしていらっしゃるでしょう。

b. 田中さんが先生をお招きしする。二人の談話主題の関係を表わす)

c. 田中さんが招いていらっしゃる。(話し手と談話主題の関係を表わす)

このように、日本語の敬語の構造の特徴は次のような３つの評価的機能に分類できよう。

① 礼儀〔丁寧〕的機能：動詞＋ます

② プラス評価的機能：お＋動詞＋になる

③ マイナス評価的機能：お＋動詞＋する

①の礼儀的機能は、話し手と聞き手の関係に関するものである。なぜなら、統語上の主語が明らかでないときだけではなく、主語が[-Human](または[-Loquent])の意味素性をもつときにも、「-ます」が現れるからである。

(8) 遅くなりました。／(9) びっくりしました。／(10) 雨が降っています。

②のプラス評価的機能は、談話主題に関するものである。

(11) あの方には財産がおありになる。

しかし同様に話し手は、聞き手と談話主題の関係も表わすことができる。

(12)
田中先生は中国語がおわかりになりますか。(田中先生、あなたは中国語がおわかりになりますか。／田中先生、あの方は中国語がおわかりになりますか。)

(13)
先生はこの本をお読みになりましたか。(先生、あなたはこの本をお読みになりましたか。／先生、あの方はこの本をお読みになりましたか。)

③のマイナス評価的機能は、談話主題にも働くものなので、(14)(15)のような発話は解釈が曖昧になってくる。

(14) ただいまそちらへまいります／うかがいます。

(15) お荷物は真理子がお持ちします。

よって、以下のように言うことができよう。

①マイナス評価の形が用いられるとき：
話し手が自分を指示し談話主題となったとき。または、談話主題が話し手と同じ社会的領域(家族、同じ社会的グループ)に属しているとき。

②プラス評価の形が用いられるとき：話し手が聞き手と談話主題を同一のものとみなすとき。または、談話主題が聞き手と同じ社会的領域(家族、同じ社会的グループ)に属しており、話し手が聞き手の視点が談話主題と同じ位置にあるとみなしたとき。

また、話し手が誰かを自分の領域にも聞き手の領域にも属していない距離のある人物、すなわち談話主題とみなした場合は、普通体か丁寧体(これは聞き手に敬意を払うとき)のどちらかを選択することになる(2)。

以上のように、日本語の敬語は話し手が発話当事者または非発話当事者の行為にどのような価値をおくかを表わすため、そのカテゴリーは、評価の問題としてとらえられる［1］。

①プラス評価をする、ということは話し手以外の談話主題または聞き手の領域に属する人物の行為を肯定的に形容するということである(つまり、聞き手または聞き手の談話領域に属する人物の行為に関する)。

②マイナス評価をする、ということは既規定外の談話主題または話し手の領域に属する人物の行為を否定的に形容するということである(つまり、話し手または話し手の談話領域に属する人物の行為に関する)。

4. 敬語の表示的な機能(ostensive fonction)

西洋語における「人称」の定義について、Jakobson(1956)は動詞における人称のカテゴリーは「転位語」だとしている。なぜなら人称は「発話行為の当事者」を指示することによって、発話内容の中心人物を特徴づけるからだ。このように、第一人称は発話内容の中心人物の一人と発話行為の動作主が同一であることを示し、第二人称は発話内容の中心人物と発話行為の実際の(あるいは潜在的な)被動作主が同一であることを示す。このJakobsonの定義を言い換えると、「第一人称」は話し手と発話の主語の同一性、「第二人称」は聞き手と発話の主語の同一性、そして「第三人称」は談話主題と発話の主語の同一性をそれぞれ示していると言うことができる。

「表示的な機能」とは、発話行為の当事者または発話行為の非当事者と、発話内容の当事者または非当事者が同一であるかどうかの関係を形成するものである。英語やフランス語などいくつかの西洋語においては、この機能はとりわけ発話当事者と主語の同一性だけではなく、発話当事者と統語上のほかの項のひとつとの同一性を示す人称代名詞によって表わされる。例えば次のフランス語の例がそうである。

《je》：話し手＝主語　／《me》：話し手＝直接目的語または間接目的語／《moi》：話し手＝主題または間接目的語(例：a moi)

また、人称代名詞[+Loquent]と、人称代名詞[-Loquent]を区別しなくてはならない。これは特に英語のhe(she)/itに関することである。発話をする人称代名詞は、非発話当事者と発話内容の行為項の一つが同一であることを示す。しかし、発話をしない人称代名詞は、人称というカテゴリー有する言語において、統語的欠陥を残さずにすべての名詞句[-Loquent]を消すことができる。しかし一般に、西洋語においても、表示的な機能はとにかく動詞から派生した機能なのである。また、ラテン語、ポーランド語などでは、主語を担う人称代名詞の用法さえなく、動詞の形だけで主語を判断できる言語もある。また、バスク語の人称には、動詞の形の「複人称」とでも言うべきものがある。つまり、主語にあたる人称を多様化させるかわりに動詞の形がほかの参加者を指示する手掛かりになるのである。例えば他動詞の直接目的語、時には自動詞・他動詞の受益者などである(Allieres1979)。このように、バスク語は、語用論のレベルと統語論のレベルの間に人称のカテゴリーを形成する本論と非常に関わりの深い例なのである。

Jakobsonの「発話当事者の一人と発話内容の中心人物の同一性を示す」という表示的な機能」定義は、人称のカテゴリー全容を表すものと言える。この機能を提示したのは、人称のカテゴリーをたて直すためではない。表示的機能について考え直すことによって、カテゴリー的な意味と、副次的な意味(特に敬語としての意味)が組み合わせられたものとして人称を扱うことができるからである［2］。

［付記］なお、細川英雄氏（早稲田大学教授）と生田裕子氏（グルノーブル大学講師）の援助に対し、深く感謝いたします。

【注】

［1］このように、発話当事者と非発話当事者のメタ指示的な同一関係を容易につくることができる点が日本語の特徴として挙げられる。今話題になっている非発話当事者はその場にいてもいなくても、日本語においては常に、談話の目標としてみなされるのである。西洋語において話し手が客観的世界について話すとき、第三人称を用いるのと異なり、敬語の体系において「客観化」は第三人称と一体になることによって行われる。たとえば、「太郎さんはフランスは初めてですか」のような文をフランス語に訳すとき、「太郎」に第二人称を選ぶか、第三人称を選ぶかが曖昧なのだが、それはこのような日本語の特徴による。

［2］本論では、紙幅の関係で、日本語の敬語体系に関する形式化の問題についてはふれることができなかった。稿を改めて論じることにしたい。

引用文献

田中幸子，1983，　「敬語を整える」『倉日本語新講座５巻』 朝倉書店

FRASER Thomas et JOLY André (1979) "Le Système de la deixis (esquisse d'une théorie de l'expression en anglais)" in Modèles Linguistiques, T. 1 Fasc. 2.

JAKOBSON Roman (1963) Essais de linguistique générale, Editions de Minuit, Paris.

HAGEGE Claude (1982) La structure des langues, Collection « Que sais-je ? », PUF, Paris.

Lewin(1989)

LEWIN Bruno (1969) “Honorative Sprachformen des Japanischen im Zeitalter der Demokratisierung “,in "Beiträge zum interpersonalen Bezug im Japanischen", herausgegeben von Bruno LEWIN, pp.167-184. Otto Harrassowitz, Wiesbaden.

MAILLARD Michel (1972) « Essai de typologie des substituts diaphoriques », in LANGUE FRANCAISE, N。21/72. Larousse - Paris.

北原保雄，1979，「敬語の構文論的考察」『日本語研究』 論集、9巻 有精堂

JAKOBSON Roman (1956) “Shifters, verbal categories and the Russian verb" , Russian Language Project, Department of Slavic Languages and Literatures, Harvard University.

ALLIERES Jacques (1979) Les Basques, Collection « Que sais-je ? », premiere edition 1977, PUF - Paris.